

ご 挨拶

「学会と地域貢献」

会長 志手 典之（北海道教育大学岩見沢校）



二期目の初年度を無事に終了することができました。私ごとで恐縮ですが、平成27年10月1日付けで北海道教育大学副学長職を拝命し、札幌校での執務と岩見沢校での勤務と多忙な日々を送ることとなっております。役員会への出席もままならず、副会長・理事長を始め役員の皆様には多大な御迷惑をおかけしております。平成28年度も御迷惑をおかけすることとなるかと思いますが、よろしく願いいたします。

平成26・27年度の学会大会シンポジウムにおきまして、「子ども達の体力」をテーマに取り上げ、北

海道・札幌市教育委員会の取り組み、学校や地域での取り組みが明らかとなり、学会として北海道の子ども達の体力向上にどのように寄与できるかが議論できたと思います。北海道の子ども達の体力を研究してきた一研究者として、これからも子ども達の体力向上に関する成果を公表し、地域に貢献できる研究を心掛けることを新たにしているところです。

最後になりましたが、平成27年度の学会大会では、名寄市立大学の関先生・黒河先生・三井先生には、大変お世話になりました。また、懇親会後の二次会も大いに盛り上がり、ある意味、有意義な大会で終われたことに感謝いたします。

「学会HPの運用向上を目指して」

理事長 神林 勲（北海道教育大学札幌校）



平成27年4月から、理事長を務めることになりました。志手会長2期目の学会を、事務局の先生方（安部先生、中道先生、大山先生等）と連携して実務面で支えて行ければと思っています。今後の学会運営につきまして、皆様の益々のご協力をお願い致します。

さて、皆さん、北海道体育学会のHP (<http://www.hspehss.jp/>) はよくご覧になりますか？ 12月14日15時の時点で、アクセス数は3716。HPは2014年9月4日にリニューアルされていますの

で、これまでの1日の平均アクセス数は凡そ8回になります。広報委員会の先生方（小出先生、木本先生）に随時、更新して頂きながら、会則をはじめとする各種規定、役員会議事録、学会大会要項やプログラム等がアップされていますので、ぜひご覧ください。

学会ではHPの利用を高めようという方向性を持っています。主な理由は、学会としての情報発信をより一層向上させたいということからです。先日の総会（名寄市立大学）でもご紹介しましたように、H24年度（52回大会）以降の予稿集が12月14日、HPにアップされました。機関誌も近日中に公開予

定です(平成 28 年 3 月 24 日にアップされました)。これによって、学会での研究活動が広く公開され、関係する多くの方のお役に立てる機会が格段に高まります。このニュースレターも本号から HP へアップされる予定です。

今後、会員の皆さんへの情報発信や役員選挙な

ども HP を運用して行っていくことを検討しています。そのためには会員の皆さんの E-mail アドレスの集約が不可欠です。ご協力をお願い致します。12 月 18 日 13 時、アクセス数 3780。この 4 日間の平均アクセスは 1 日当たり約 16 回。早くも予稿集アップの効果でしょうか。

シンポジウム傍聴記

「子どもの身体づくり —地域の取り組みから—」

水野 眞佐夫 (北海道大学)

豪風雪の予報に脅えながらたどり着いた名寄は予想外に穏やかであり、悪天候の予兆とは程遠く過ごせた二日間であった。本大会開場となった名寄市立大学において、口頭発表と熱い質疑応答で開幕した大会初日の午後、当日最後のプログラムとして、「子どもの身体づくり —地域の取り組みから—」が開催された。

名寄市を拠点とした地域での取り組みについて、福川洋枝先生(名寄市立名寄小学校)、須藤雅典先生(名寄市立名寄中学校)、黒河あおい先生(名寄市立大学)をシンポジストとして、三井豊先生(名寄市立短期大学)の司会により、各々の実践が報告された。

福川先生は、名寄市立小学校での体力向上に向けた実践とその成果の報告をされた。休み時間や体育授業における身体活動を支援するのみではなく、「早寝・早起き・朝ごはん」をスローガンに子どもの生活全体を支援する取り組みの成果を報告された。改めて、運動習慣のみでなく生活習慣全体を改善することが子どもの体力向上には不可欠であると実感した。

須藤先生は、名寄市立名寄中学校における体力向上の取り組みについて報告された。体力テストの成績は生徒のやる気と練習により向上し、そのことが子どもに自信を持たせるきっかけとなること、また、その後の生涯スポーツ実践への意欲につながり、結果的に体力向上に貢献するという内容を紹介された。

黒河あおい先生は、子どもの身体づくりと栄

養について発表され、中でも子どもの食の現状と課題について報告された。食事の課題には、量や時間の他にも環境や内容の問題があることを指摘され、個人を対象とした学校での指導の必要性と、子ども自身にとって必要な量を正しく知ることの重要性を説かれた内容であった。子どもの体力向上にとって、運動の発動を促す“意志”と継続を可能とする取り組みの重要性を実感するとともに、運動と組み合わせる栄養指導の重要性が改めて心に響くシンポジウムであった。

最後に、シンポジスト 3 名の先生方をお招きしての懇親会、そして 2 次会、3 次会まで続く記憶に残る大会となり、本大会担当の関朋明先生(名寄市立大学)をはじめとする大会関係者の皆さまへ心より感謝を申し上げます。



口頭発表傍聴記

中島 寿宏（北海道科学大学）

今年度の学会大会は雪が降り積もる名寄での開催となりました。口頭発表は1日目が14題、2日目が9題の計23題。このうち、10題が若手研究者の先生による発表です。昨年度の学会大会でも若手研究者発表が13題と多くあり、北海道内での若い研究者たちによる積極的な研究活動の広がりを感じます。紙幅の都合上、すべての演題についてのコメントは難しいため、今回はこれら若手研究者発表について演題ならびにその内容についてご紹介させていただきます。

- 1) 稲川祥史先生（北翔大学大学院生涯スポーツ学研究科）は、「台高の異なるドロップジャンプにおける前十字靭帯張力及び着地動作戦略の比較」というタイトルにて発表されました。大学生を対象として異なる高さからのドロップジャンプにおける前十字靭帯張力と着地動作戦略の比較について動画やイラストを用いて報告されています。
- 2) 神有理紗先生（札幌国際大学スポーツ人間学部）は「大学野球選手における投球速度及びスイング速度に關与する体格・体力因子」というタイトルにて発表され、スイングにおける下肢動作や、下肢-体幹-上肢の力の伝達の重要性などを検証されていました。
- 3) 渡部峻先生（北翔大学大学院生涯スポーツ学研究科）は、「野球・投球動作中の身体回旋を生み出すための下肢の動作戦略」というタイトルにて発表され、投球動作中の下肢を中心とした身体回旋運動の力学的メカニズムについての分析結果を報告されました。
- 4) 沼田薫樹先生（札幌国際大学スポーツ人間学部）は、「大学男子ハンドボール選手のジャンプシュートスピードに対するパフォーマンス変量の關与」というタイトルにて、ハンドボールにおけるジャンプシュート時での体重・跳躍高とシュートスピードとの関わりについて報告されました。
- 5) 石原暢先生（北海道大学大学院教育学院）は、「青年テニスプレーヤーにおけるシングルゲーム時の注意機能と競技パフォーマンスの關係」というタイトルにて、安静時および試合中の注意の切り替えとシングルゲームでの得点率との関わりについて報告されました。
- 6) 秋月茜先生（北海道教育大学札幌校研究生）は、「小学生の自律神経活動と体力・運動能力との關連」というタイトルで、総自律神経系活動と体力・運動能力の關係における男女の違いについての検証結果を報告されました。
- 7) 小野地柊先生（北翔大学大学院）は、「初心者対象としたゴルフ指導に關する研究」というタイトルにて、ゴルフスイングの指導におけるアドレス姿勢習得やスモールステップによる指導の重要性について報告されました。
- 8) 石本千春先生（北海道大学教育学研究院）は、「地域におけるスポーツチームの自律性 - スポーツチームの經營面に着目して -」というタイトルで、YOSAKOIソーラン祭りを題材とした具体的な事例を挙げながらコミュニティスポーツにおけるチームメンバーの自律性の重要性について報告をされました。
- 9) 吉村茜先生（北海道教育大学岩見沢校芸術・スポーツ文化学科）は、「ストレッチポール『ベーシックセブンプログラム』実践前後の即時的影響～客観評価と主観的身体評価の關係からみたケーススタディ報告～」というタイトルで、ストレッチポールを用いたプログラムの有効性について客観的・主観的評価の結果を報告されました。
- 10) 山田雪花先生（千歳市立富丘中学校）は、「空手道の未経験者を対象とした自由組手の指導に關する研究」というタイトルで、空手の経験のない大学生を対象とした教授プログラム実践において参加者が楽しさを感じながら空手の習得していく成果について報告されました。

会場では、各セッションにおいて活発な議論が行われ、大変盛り上がりのある口頭発表でした。今大会のように、若い世代の研究者の方々が積極的に発表や研究交流に参加していただくことが、今後の北海道における体育・スポーツ・健康分野での学術的發展に大きく貢献していただろうと感じられます。

今回、ご発表いただきました先生方、ならびにディスカッションに加わっていただきました参加者の皆様方に感謝申し上げます。

ポスター発表傍聴記

木本 理可（旭川工業高等専門学校）

今年度の学会大会では、1日目の午後にポスターでの研究発表が行われました。演題数は10題と、ここ数年の中では最多ではないかと思われます。以下に、演題ならびにその内容について簡単に紹介させていただきます。

- 1) 「雪を使った外遊びプログラム「スノーゲーム」の開発」青木康太郎先生（北翔大学）：雪を使った外遊びプログラム「スノーゲーム」を開発し、「運動系」「探索系」「共感系」に分類された計8種類について、その指導のポイントとともにご紹介された。
- 2) 「高校野球部の動機づけ雰囲気とチームメイト要因との関係—学年・競技レベルに着目して—」平間康允先生（札幌国際大学）：高校野球部を対象とし、「熟達雰囲気」と「成績雰囲気」の動機づけ雰囲気に対するチームメイトの影響についての検討結果をご報告された。
- 3) 「小学生の体力と運動・生活習慣および自然体験活動の複合的関連」小林秀紹先生（札幌国際大学）：札幌市の児童を対象に、体力に対する生活・運動習慣と自然体験活動の複合的関連について親の養育態度を踏まえて検討され、多岐に渡る自然体験活動への参加実態についてご報告された。
- 4) 「中学生と高校生の加速区間と最大疾走速度区間のピッチ・ストライド」宮崎俊彦先生（北海学園大学）：中学男子・女子、高校男子を対象に、室内50m走の加速区間と35－45m区間のピッチ・ストライドの1年後の変化について、接地時間や疾走速度等との関連とともにご報告された。
- 5) 「極小規模小学校における合同体育の事例研究」高瀬淳也先生（鹿追町立上幌内小学校）：極小規模小学校における合同体育を対象に、「ネット型」ボール運動の学年別指導法について「直接指導」と「間接指導」の2場面に着目してその有効性についてご報告された。
- 6) 「高等特別支援学校におけるハンドボールの指導実践」梅田千尋先生（北海道小平高等養護学校）：知的障害高等特別支援学校の生徒を対象とし、コートやゴールの大きさ、ボールの種類等について工夫し、障害特性を配慮したハンドボールの指導実践についてご報告された。
- 7) 「中学生の体格と学業成績との関連性に関する縦断的検討」森田憲輝先生（北海道教育大学岩見沢校）：道内の中学生を対象に、学業成績と体格の関連性を縦断的データを用いて検討され、女子中学生では体格・肥満が学業成績に影響する可能性についてご報告された。
- 8) 「特別支援学級における「スポーツタイム」の取り組みに関する報告（第一報）—体の動き、関わり合いに着目して—」吉川博人先生（北海道教育大学大学院）：特別支援学級の児童を対象に、「スポーツタイム」の取り組みの効果について検討され、個別の支援や教師の言葉がけの重要性についてご報告された。
- 9) 「現代的なリズムのダンス」における指導内容の明確化について」増山尚美先生（北翔大学）：大学生を対象に実施したダンスの学習モデルについて記録カードの内容を中心に検討され、ダンス経験の少ない教員にも指導可能な「現代的なリズムのダンス」の学習モデルとしてご報告された。
- 10) 「小学校低学年におけるSAQ能力評価のための新規テスト（N Challenge）の信頼性」奥田知靖先生（北海道教育大学岩見沢校）：短時間で多様なSAQ能力を評価でき、子どもが自発的・積極的に取り組める自動計測システム（N Challenge）を開発され、その信頼性についてご報告された。

会場は、それぞれのポスター前に移動するのが困難なほど多くの方にご参加いただき、1時間の枠内では議論を尽くせないほどの盛り上がりでありました。また、今回はどの演題も「子ども」や「学校」に関連のある話題であり、現役の小・中学校、高校の先生方によるご発表も年々増えているように思います。

子どもの体力問題において北海道の広大さはデメリットとして語られる場合が多いですが、だからこそ多くの方が、様々な場所で様々な立場からこの課題の解決に真摯に取り組まれていることを強く感じました。今後も学会大会が、その成果を発展させ、共有する場としてさらに充実していくことを期待しております。

「学会賞をいただき1年たって思うこと」

宮崎 俊彦（元札幌市立元町中学校、北海学園大学非常勤講師）

学会賞をいただき有難うございます。「中学教諭が学会賞をとるまで」というタイトルで話させていただいて1年、2004年を皮切りに6篇北海道体育学研究に載せていただいた（学会賞規定を参照）。今年の北海道体育学会名寄大会に参加して昨年とは違った方に声をかけていただいた。

それは、現役の小中高の先生でありながら大学院生になっている方からだった。「仕事をしながら研究するために大事にしていることは何ですか？」と聞かれ、まず思ったのが研究資金の獲得である。それを教えてくれたのは北大の医学部講座の忘年会であった。講座がその年にいくらか競争的資金を得、国際雑誌、国内雑誌に掲載された論文は何篇あったのが教授から話される。その時に私は初めて研究に資金が必要なことを知り、資金獲得の重要性を痛感した瞬間であった。私は資金を獲得すれば学会に行く費用に充てることができると思った。

その当時、データをどうとるのか、どう処理するのが私の悩みだった。結論から言うと考えるよりは学会に行った方が早い。本を10万円分読むよりも1回学会に行く方がもっと早く多くの情報を得ることができる（黙っていては誰も声をかけてくれない。質問すれば疑問は解消され、何より多くの人と知り合いになれる）。となると、例えば東京の学会に行くとして、経費は15万円ぐらい必要だろう。それを補助する資金獲得は私にとって大きかった。小中高校の教諭が応募できる奨励研究・下中財団・教職員弘済会、その他の財団の助成金などある。研究助成金の申請には研究の展望、研究の方法が記載された研究計画書を提出しなくてはならない。それだけでも、かなりの準備時間が必要である（締め切りから逆算して考える）。研究助成が当たれば、測定・調査を行ってデータを得なくてはならない。そのデータ整理・報告書作成と進めていくと、もう抄録ぐらい書けるようになっていく。

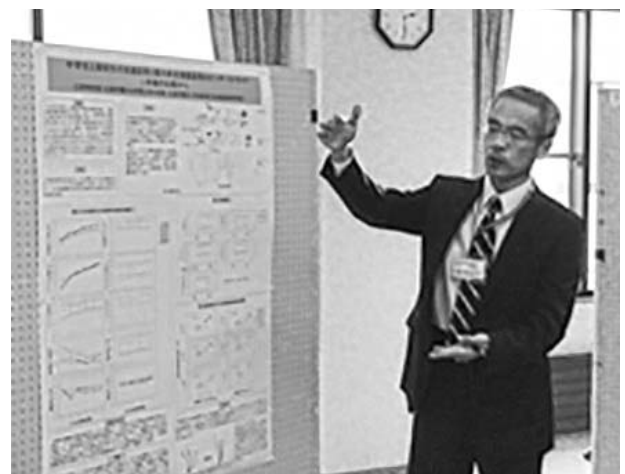
いま、6篇の論文を振り返ると、私の後悔が一つある。多くの生徒を扱う研究には体制作りが必要だということだ。それは「モラル低下」防止モデルの作成」をまとめたときであった。このテーマはPTAを巻き込み、教育委員会の研究委託も受ける

仕事となった。生徒を取り囲む環境要因の一部を明らかにし、中学教員ならではの研究と自負していた。

しかしその時には、この研究を大勢の応援してくれる人がいて、まとめられた事に気づいていなかった。多くの生徒を対象にした研究は、体制づくりにかなりの労力を要し、説得する覚悟がいる。その覚悟が私にはなく、その後、この分野の研究を継続することができなかった。

冬の室内練習を扱った4篇の論文では、違った学校の研究仲間の先生たちと測定を進めることができた。測定の打ち合わせ、データの見方、論文の構成等、忌憚のない意見を聞かせてもらい、それぞれの先生の特徴を活かして研究を推し進めることができた。忌憚のない意見をもらえたからこそ論文がまとまったと言っても過言ではない。なくてはならない仲間である。

論文の別刷りができたら、学会で指摘していただいた先生に別刷りを送付している。その先生をはじめ知り合いの著名な先生から「現場の先生なのによく頑張っている」と言っていたこともあった。そのようなコメントをいただいた学会から帰化する飛行機の中では、これまで以上のやる気が湧き、真剣にデータ分析や次の測定の構想に取り組んだ。この機内の時間をおいてほかに「また頑張ろう」と思うことなどないからである。次の日からは、生徒の中に紛れて、くたくたになる毎日が待っている。でもまた、学会に行くためにデータをまとめる、それだけ学会には魅力がある。



若手研究者賞を受賞して

稲川 祥史（北翔大学大学院）

この度は、このような名誉ある賞を頂き、誠にありがとうございます。

本学会大会では、「台高の異なるドロップジャンプ着地動作における前十字靭帯靭帯張力および着地動作戦略の比較」という題目で発表をさせていただきました。このような研究テーマの設定に至った背景には、スポーツ外傷・障害によって、継続的なスポーツ活動を阻害されるアスリートの存在があります。

私は、2014年10月に日本体育協会公認アスレティックトレーナーの資格を取得しました。現在は、主に学内のアスリートを対象として、コンディショニング指導やアスレティックリハビリテーションを実施しております。トレーナーとしての活動歴は浅いですが、これまでに前十字靭帯損傷を受傷したアスリートに携わる機会がありました。一般的に、前十字靭帯損傷のリハビリテーションは、半年以上の長期間を要します。

学生アスリートにとっては、ユニバーシアードやインターカレッジなど、学生の間にはしか出場することの出来ない競技会が存在します。そのため、アスリートがこれらの競技会への出場機会を逸さないため、また、継続的なトレーニングを実施するために



も、前十字靭帯損傷などのスポーツ外傷・障害を予防することが必要です。私は、このような外傷・障害予防を目的としたコンディショニング指導の一助とするため、研究に取り組んで参りました。

研究過程では、膨大なデータの処理に苦心しましたが、今回の受賞によって、苦勞した甲斐があったと思えるようになりました。研究過程で多くの助言と指導をしていただいた山本敬三先生をはじめとする先生方、また、実験に協力をしていただいた皆様には、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

今回の受賞を励みとして、今後も研究活動に精進し、アスリートの競技力向上や外傷・障害予防に寄与できればと思っております。

渡部 峻（北翔大学大学院）

このたび若手研究者賞をいただく事ができ、大変光栄に思っております。私は小学生の頃から野球を続けてきましたが、大学野球において投手としてプレーしていましたが大きな壁にぶつかりました。そんな時に出会ったのがバイオメカニクスというものでした。それ以来バイオメカニクスを用いた投球動作の研究に興味を持ち、学部時代から卒業研究として研究を始めました。

その後大学院に進学し、さらに本格的に研究をスタートしました。野球投手において関心度が高い球速を高めるためにはどのようにしたらいいのかを考えながら研究を進めてきました。今回は「野球・投球動作中の身体回旋を生み出すための下肢の力学的動作戦略」というテーマで研究発表をさせていただきました。

投球動作には2つの身体の回旋が混在し、それぞれの動作の戦略が異なる。発揮タイミングが異なることをはじめとして、身体の回旋に関してだけ限定して言えば、野球界では当然の如く行われている「走り込み」や今は主流になりつつある「ウエイトトレーニング」もあまり効果的とはいえないのではないか。これらの私の考察が、発表を聞いてくださった方々



に伝わったのではないかと嬉しく思っています。

これまでわずかな期間ですが、研究を進めてきて感じたのは、選手・コーチなど現場の方々のニーズを踏まえ、現場において困っていることや明らかにして欲しいことをふまえ、役に立って初めて意味のなすものであるということです。つまり、単に不明な点、不明確な点を自分の興味だけで明らかにすることだけではない、ということ学びました。

これからもこの賞に恥じぬよう、現場の選手・コーチに有益な情報を提供するために、研究を進めてまいります。

北海道体育学会第 55 回大会を終えて

大会担当 関 朋明 (名寄市立大学)

2015年11月28日(土)・29日(日)の2日間にわたり、名寄市立大学において、北海道体育学会を開催いたしました。これまで最北の学会大会は、士別市(2003年)でしたが、さらに北上する名寄市にて開催できたことは、大会委員長として感慨深いものでした。また、天候が心配される時期にもかかわらず、59人(正会員42名、学生会員17名)の皆様のご参加をいただき、学会を成功裡に終えることができました。本当にありがとうございました。

今回のシンポジウムでは、「子どもの身体づくり—地域の取り組みから—」と題し、福川洋枝氏(名寄小学校)、須藤雅典氏(名寄中学校)、黒河あおい氏(名寄市立大学)の3名より、子どもの身体づくりに関する教育現場の実践的な話題を提供いただきました。司会を務めていただいた三井登氏(名寄市立短期大学)の巧みなコーディネートによって、とても活発な質疑応答となりました。参加された方々には有意義なシンポジウムとなったことでしょう。また、口頭発表、ポスター発表におきましても、随所に積極的な議論が行われ、主催者として嬉しい限りでした。

そして名寄の夜。懇親会では、お酒を交わしながら

ら意味深いお時間をお過ごしいただくことができたように感じています。二次会も大盛況でした。

最後になりますが、私の不手際があったであろうにもかかわらず、何とか無事に終えることができたのは、参加者皆様の温かいご支援があったからです。本当に感謝しております。また、4月から事務局となられた安部先生にとっては初めての学会大会にもかかわらず、段取り良くお力添えをいただき、心よりお礼申し上げます。ありがとうございました。

次年度(酪農学園大学)の大会の成功を心より祈念いたします。



研究委員会活動報告

研究委員長 安田 貢 (札幌大学)

本年度の学会大会は33題の研究発表をいただきました。これは過去最多タイの演題数です。体育・スポーツ領域における身近な疑問に対して、様々な視点から取り組んだ研究成果が現場に還元され、新たな研究課題に取り組む研究者と現場・地域との好循環を生んでいることが大いに期待できます。昨今の研究は生理指標を用いて“身体”、“こころ”の可視化を目指す研究手法が多く見られるようになりました。研究を進めるに当たり、本学会において研究助成の運用方法について学会員の皆様からご要望等の意見をいただきながら新たな運用規定を公表し、学会員の皆様の研究支援に努めたいと考えております。

本学会の特色のひとつに若手研究者賞が挙げられます。地方学会でありながら定期的に学会大会が開催できるひとつの要因であることは間違いありません。今年の若手研究者賞は10題のエントリーがありました。厳正な審査の結果、稲川祥史氏(北翔大

学大学院)「台高の異なるドロップジャンプにおける前十字靭帯張力及び着地動作戦略の比較」と渡部峻氏(北翔大学大学院)「野球・投球動作中の身体回旋を生み出すための下肢の動作戦略」が受賞されました。研究手法や抄録の内容が優れたものであり、それぞれの専門領域をわかりやすく丁寧に発表してくれました。若手研究者として今後の活躍が期待されます。受賞を逃した方々におかれましても研究成果を現場に還元したい強い意志を感じました。今後も研究を継続して欲しいと思います。

本学会総会において日本体育学会からの独立化のあり方について報告がありました。会員の皆様の研究活動が本学会の自律的な組織運営を可能にする礎であります。会員の皆様のオリジナリティーある研究に研鑽され様々な機会を通して発表していただけることを期待いたします。

編集委員会活動報告

編集委員長 石澤 伸弘（北海道教育大学札幌校）

平成 27 年末に「北海道体育学研究」第 50 巻の記念号をお届け致しました。記念号ということで、50 巻には 11 編（原著論文 6 編、研究ノート 3 編、実践研究 2 編）の論文掲載のみならず、歴代会長と名誉会員の先生方より特別にご寄稿をいただきました。ご協力いただきました諸先生方に厚く御礼申し上げます。

また、「北海道体育学研究」50 年のあゆみを振り返るべく、本学会名誉会員で、北海道大学名誉教授であらせられます須田 力先生のご協力の下、編集委員会におきまして「学会誌と学会 これまでの歩み」を作成し、50 巻の頭部分に掲載致しました。

歴代会長のお名前とご所属や、学会誌と学会大会のこれまでについて、須田先生より詳細且つ貴重な情報を多々お寄せいただきました。こと本誌の歩みに関しましては先生のご寄稿文、『北海道体育学研究』の『知層』を掘り起こすと併せてお読みいただくと更に理解が深まると思われまふ。また、先生とのメールの遣り取りの中で、ご寄稿文中には見られない貴重な「トリビア」的情報もいただきましたので、ここでご紹介致します。

「(本誌) 10 巻までは当該年度の 12 月発行でしたが、11 巻あるいは 12 巻から翌年 3 月となって 20 巻からは年を越えて次年度の 6 月に発行となっております。

尚、研究発表大会の第 23 回大会は(中略)この年、日本体育学会を北海道で開催するため、北海道体育学会をあげて大会開催にエネルギーを集中しようということで、発表演題なし、シンポジウムのみとなりました。」

とのことです。貴重な情報をお寄せいただきました須田先生に重ねて御礼申し上げます。

更に、歴代会長の先生方のご寄稿文も当時の学会の様子が伺え、これまた貴重な資料となり得るものばかりです。学会員の皆さまにおかれましては、前述した「～これまでの歩み」と照らし合わせ、学会の萌芽期に想いを馳せていただきたく存じます。

さて、平成 28 年がスタートしましたが、我が「北海道体育学研究」も「次の 50 年」に向けての新たなスタートを切ることとなります。会員の皆さまよりの一層のご支援とご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

広報委員会活動報告

広報委員長 小出 高義（北海道教育大学旭川校）

今年度より広報委員長を務めさせていただくことになりましたが、実際の所はかねてより広報委員を務めてこられた旭川高専の本本先生に、仕事内容を教えて頂きながら進めているところです。

さて、広報委員会の主な活動は、ご存じの通りこの「ニュースレターの発行」と「学会ホームページの運営」となっています。このニュースレターは、これまでも学会での内容や雰囲気、参加できなかった先生方にお知らせするよう編集されてきました。

そのためにもできるだけ早く発行し、次の大会参加の動機付けになればと願っています。この 7 号の発行に関しては、どの先生におかれても原稿の作成を快くお引き受け頂くとともに、興味深い内容について執筆頂き、感謝申し上げます。

このニュースレターの編集については、会員の皆さまのご意見をもとに改善を重ねたいと考えていますので、広報委員までお寄せ頂ければと思います。

次に、ホームページの運営ですが、これまでは学会大会に関する情報などを中心に発信してきまし

た。これに加えて、理事長のご挨拶にもあったように「北海道体育学研究に投稿された論文」や「学会大会での抄録」を、学会員以外の方にも広く公開していこうとしております。

さらに、前広報委員長より宿題とされていたこのニュースレターの電子化により、ホームページでの掲載や会員へのメール配信も進めていこうと考えています。それにより、印刷や発送にかかる経費も削減できるものと期待しています。けれども、これには会員の皆さまのアドレス登録を重ねてお願いいたします。

これまで、ホームページの運用上の問題としては、その使用する容量から、どこまでの論文などを掲載できるか、これまでの論文の掲載承諾をどのように得るのか、などの検討をしてきました。まだまだ検討すべき事はあるかと思いますが、これもまた会員の皆さまからご意見を頂きながら、よりよい運営を目指していきたく考えています。

(リレー)

井出 幸二郎 (北翔大学)



1987年全国高等学校総合体育大会が北海道で開催され、私は1600メートルリレーのメンバーとして参加した。試合当日の札幌は雨と風が強く、気温が低く、暑い福岡から来た私は身体が思うように動かず、予選落ちしてしまった。

中学時代に出会った先生から、「何か目標や夢が見つければ、それを達成するためには楽しみや遊びを犠牲にし、一つのことに打ち込みなさい」と教わり、教え通り目標のために努力した。目標は達成できずとも努力の過程で学び成長することができ、時として自分自身の成長には人以上の努力が必要であることも競技を通して学んだ。その後、中学、高校と陸上競技を通じて経験して得たものを後輩にも伝えたいと体育教員を目指し、大学へ進学した。

大学でも競技は続けトレーニングにより身体能力も向上したが、当時は調整の仕方もよく知らず、大事な試合直前に怪我をしたこともあり、思うような結果を残すことができなかった。大学3年から運動生理学研究室に入り、研究と出会った。当時の私にとって、「運動が生活習慣病の薬になる。」ことが衝

撃的で、大学で勉強したことを社会に還元できるような体育の専門家になることを目標に、論文、参考書を読み漁った。研究の面白さに魅かれ、大学院へ進んだ。当時、コペンハーゲン大学医学部で講師をされていた水野眞佐夫先生(現北海道大教授)の講演を聴く機会にも恵まれた。水野先生からは、

1. 何からでも誰からでも学ぶ。
2. 心がときめいた研究課題をつかむ。
3. 解ける部分から解いていく。

と、後進へのメッセージをいただいた。

その後、水野先生から便宜を図っていただき、コペンハーゲン筋肉研究所・Niels H. Secher教授の下で研究する機会をいただいた。世界のリーディングサイエンティストが集まる研究室で積み重ねた経験は何ものにも代えられないものであった。また、ここでは北海道にゆかりのある先生方にもお会いすることができた。コペンハーゲンで経験を積んだ後、カナダのカルガリー大学で研究する機会も得ることができた。どこへ行っても、目標を達成するためには、中学時代の恩師の教えや競技を通して学んだことが生きていた。

そして、北海道で教員生活を送ることとなり、早くも4年経った。私が経験したこと、学んだことをバトンとして早く後進へつなぎたい。

(それでも書くのだ)

高瀬 淳也 (上幌内小学校)



「学会は、小学校の教員が参加してもいいの？」こんな状態から、私の学会活動が始まり、早3年が過ぎました。気が付けば北海道体育学会において、口頭発表、ポスター発表、論文投稿という学会の一通りの発表をさせていただきました。私の教員仲間に、学会に参加して発表している人がおらず、本当に貴重な経験をさせていただいていると思います。

しかし最近、生意気ながら「書くことがつらい」という気持ちを持つようになりました。日頃から、保護者向けの学級通信や職員会議用の提案文章などを作成する機会がたくさんありますが、論文になると全く別物です。パソコンの電源を入れるのが嫌になり、時には書斎に入ることすら体が拒否することもあります。所属する学会誌を読むと、私には到底

及ばない質の高い論文ばかりで、ますます落ち込むばかり…。

そんな時、題名にひかれて買ってしまった本にこんなことが書かれていました
「文章をたくさん書いても、書くのが楽しくなったり、書きたくなったりはしない。書くという作業は難しいし、今後もずっとそうだろう。書くというのはつらい作業でもある。今後もずっとそうだろう。」(引用文献:「できる研究者の論文生産術」ポール・J・シルヴィア 講談社、p.155)

質の高い論文を書かれている先生方も、相応の労力と時間、そして「つらさ」に耐えているのだということがわかり、自分なんてまだまだ…と感じました。

今、国語の教科書には、子どもたちに表現力等の育成を目指し、自分の考えを書いたり、調べたことをまとめたりする教材がたくさん掲載されています。子どもたちからは「うわぁ、作文書くのか…」との声。その気持ちにとっても共感できる今日この頃です…。

事務局から

安部 久貴（北海道教育大学岩見沢校）

初めまして、平成 27 年度より当学会幹事として事務局業務を担当しております、安部久貴（北海道教育大学岩見沢校）と申します。事務局は現在、私と中道莉央先生（北海道教育大学札幌校）と大山祐太先生（北海道教育大学岩見沢校）の 3 名で運営しております。

平成 28 年度の本学会の事業と致しましては、まず、5 月下旬に臨時総会と話題提供発表が行われます。臨時総会では、前年度の事業報告と決算報告および新年度の事業計画と予算案の審議が行われます。特に、平成 28 年度以降は日本体育学会と北海道体育学会を含めた地域学会との関係性が見直されることから、会員の皆様には事業計画などについて積極的にご意見を頂きたく存じます。また、臨時総会後には、会員相互の情報交換と研究内容の深化を目的として、話題提供発表を開催いたします。これは、過去のデータの再分析結果、他学会などの発表

と同一内容のものや構想段階のものも発表できる機会となっており、前年度は 10 演題の発表がありました。今年度は意見交換の時間を長くとれるように、発表形式を再検討しておりますので、臨時総会だけでなく話題提供発表にも奮ってご参加、ご発表頂きたいと思っております。

次に、11 月中旬には酪農学園大学にて第 56 回学会大会を開催予定にしております。近年の学会大会は発表数が 30 演題を超え、大変盛況に行われております。例年 10 月上旬が発表申込みと抄録原稿の締め切りとなっておりますので、お早目にご準備のうえ、是非多くの会員の方々にご参加頂きたいと考えております。学会大会などに関する詳しい情報は、郵送にてお知らせするほか、学会 HP (<http://www.hspehss.jp/>) に掲載いたしますので、随時ご確認頂けると幸いです。



編集後記

広報委員長を引き継いだものの、このニュースレター 7 号を、皆様のお手元にお届けするのが遅れ大変申し訳ございませんでした。名寄大会に参加された会員には振り返りを、参加されなかった会員にはその様子をお届けできればと思い編集しました。会員の人となりを知ることができると好評であったりレーエッセイも継続しました。会長・新役員のコメントも記載しました。さらなる内容の充実を企てていきたいと考えていますので、皆様のご意見をお待ちしております。

広報委員会委員長 小出 高義



北海道体育学会 公式ホームページ <http://www.hspehss.jp/>